

スメント」(人種がらみの嫌がらせ)とい  
う言葉ができたことを知りましたが、  
今から考えるとそれに相当しますね。

典型的な例は、僕が「ワスプ」の女性とデートしたり、そういう人をアパートに連れてきたりすると、彼はもう自分が抑えられないくらい不安になり、苛立つてしまうみたいだった。彼はユダヤ人女性としか付き合わなかつたから

ぜ日本人女性には興味がないのか」とか「白人と結婚してランクをあげたいのか」などと言う。要するに「分を知れ」と言っていたんでしょうね。

しっかりと日本全体がだめならだめです。日本だけが先進的で豊かでも、東アジア全体が後進的で貧しかつたらやはりだめです。日本人の中には、韓国や中国の経済発展に脅威を感じて「先端技術を教えないほうがいい」なんて言っている人がいますが、僕はそうは思わない。その原因としては、若い頃のアメリカでの「リシヤル・ハラスメント」の体験があるのかもしれません。

プロを目指そう

ピアノ演奏や作曲法の勉強に専念して、単なる趣味の範囲を越えて入れ込んでしまったのは、実は学部生時代だけではないんです。一生を通じて、断続的にそういう時期が何回かありました。SFCの岩竹教授の授業や研究会を聴講していた時期もあります。そういったことを振り返って、良かつたと思う時もあるけど、良くなかったと思う時もある複雑な気持ちです。僕の場合、非常に運が良かったから多分うまくいったんだろうと思うけど、危ない橋を渡つてきたなって思う時もあります。二股掛けで、結局中途半端な人生を送ることになってしまった人も身近に何人か知っています。伊藤もそうだ、と言つてる人もいるかもしれません。だから他の人は、そういう二股を掛けるようなことはあまり勧めたくない。学問であり、芸術であり、技術であり、スポーツであり、その分野の最高峰の人、超一流の人で二股掛けている人なんていないでしよう。たとえばイチロー選手の徹底した自己管理等について知ると、忸怩たる思いをすることもあります。

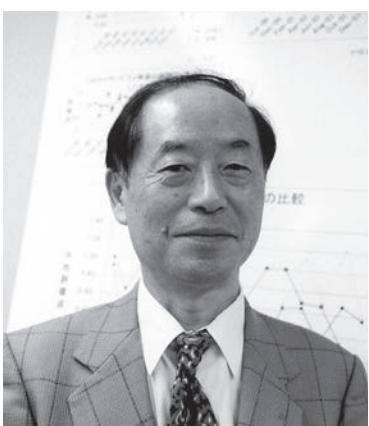
最後にこの話の延長上で、ちよつとまじめなことを言わせてもらいます。学問であり、芸術であり、技術であれ、スポーツであれ、日本人一人ひとりが、それぞれの分野で「プロ」を目指して一生懸命努力する、その結果が日本という「国のかたち」を造ることになる、その逆じやいけないと言いたい。そういうことを可能にさせる政治体制って民主主義しかないんじゃないでしょうか。民主主義以外の政治体制の下では、芸術家や学者が迫害を受けることが多くありました。

日本の左翼や右翼の一部には、第二次大戦前の日本は民主主義体制ではなかつたかのように語っている人がいますが、それは間違いでしよう。戦前の日本の政治体制は、議会、複数政党、自由選挙が存在したことから明らかかなように、基本的には民主主義です。ただ、未熟で、未発達だつただけです。「軍部独裁」だって、1937年の「日華事変」以後のことでしょう。東条英機だって、独裁者と呼ぶには在任期間が短すぎるし、彼は平和的に政権委譲してますかね。

結局アメリカには1年間滞在し、修士号に必要な単位だけを取つて帰つてきました。修士論文はNHKに戻つて、日曜出勤、正月出勤を自ら志望して、電話番をしながら完成させました。修士号取得後約1年間、仕事をしながらじっくりと考えた結果、NHKを辞めて慶應の大学院博士課程に転進することに決めました。

僕はよく学生たちに、学問というの  
はピアノを習つたり、テニスを習つたり  
するのと基本的に同じだよと言つてい  
ます。今学期はテニスを、来学期はピア  
ノを、その次はまた別のこと、とやつ  
ていつたら、4年後どんな人ができると  
思う？ 全部ある程度はできるけど、  
ひとつとして満足にできるものがない  
人間になるんじゃない。学問だって同じ。  
プロの運動選手やプロの音楽家を目指  
すのと同じ心構えでやらなきやだめ、と  
言っています。

「戦後民主主義」は「戦前民主主義」にあつたさまざまな欠陥を修正したより進化した制度です。日本人一人ひとりが、それぞれの分野で「プロ」を目指して一生懸命努力することが大切なと同様、その成功の可能性を保証してくれる民主主義という政治の枠組みをしつかり守つて、さらにそれを改善する努力を怠らないことも大切だということを強調しておきたいです。



**伊藤陽一**  
(いとう・よういち)  
総合政策学部教授兼政策・メディア  
研究科委員、情報通信学会会長。慶應義塾大学大学院法学研究科博士  
課程修了後、慶應義塾大学新聞研究所(現メディア・コミュニケーション研究所)教授、副所長を経て現職。  
専門は国際コミュニケーション論、  
政治コミュニケーション論、情報社会学、内容分析法。

# 世界への扉

新たに言語を習得することは、未知の世界への扉を開く鍵を手に入れるようなものである。「世界への扉」では、言語を学ぶことの意義とその魅力をお伝えする。第3回目はフランス語をとりあげ、総合政策学部4年の古川奈美さんにインタビューした。併せて、國枝孝弘 総合政策学部助教授のコメントもお届けする。

### 第3回：未来を紡ぐ、フランス語

## ■ 外国語学習の魅力

フランス語を学習し始めたときには、音の新鮮さで、早くこの新しい音を自分で発音できるようになりたくて、授業が終わった後も学校に残

方の「お前を日本連れ、「重宝的にせんじて」といふので、再びインテンシブIIIを履修し、コースに戻つたので、再びインテンシブIIIを履修しました。

■学外で学ぶフランス語

SFCの授業以外でフランス語を学んだことも、たいへん良い経験になりました。私の場合、1年生の春休みに参加した東京日本学院の語学プログラムで、初めて学外の授業というものを経験しました。このプログラムは、当時はSFC生専用で、1日6時間ずつを丸々2週間、計60時間の授業が組まれていました。午前中は教科書を使った語学の授業、午後はフランスの建築や哲学についての授業、というようにフランス語漬けの毎日でした。それでも楽しくて樂

■将来をみつめて

今は日本語教師になることを目標に、大学院への進学を予定しています。

その語学プログラムでの成績が評価され、2年生の夏休みにはフランス大使館主催の文化交流プログラムに招待され、フランス中南部のリモージュに2週間滞在しました。このプログラムでは、世界各国から参加した学生達と衣食住を共にしながら、フィールドワークを行ない、フランスの歴史や文化について学びました。プログラム終了後には個人的に1週間ほどフランス北西部のルーアンに滞在し、ホームステイをしながら語学学校に通いました。

り、教科書をすらすら読めるようになりますまで友達と練習していました。でもよく考えてみると、これはフランス語に限ったことではないんです。英語の勉強をしていたときも、私はいつも文法を後回しにして、音読の練習ばかりしていました。だからフランス語を学び始めた当初は、フランス語やその響きが好きというよりも、自分が今まで出したことのない新しい音を発するという行為そのものに面白さを感じていたんですね。

フランス語自体の魅力がわからり始めたのは、2年生の春学期にパトリス・ル口ワ先生のアカデミックライティングの授業を受けた頃からです。授業では、詩や小説に出てくるような員の音がちゃんと



ルーアンのホストブラザーと。

## ■フランス語を学ぶきっかけ

# Une ouverture sur le monde

これほど外国語学習に力を注いでき、なぜいまさら日本語?と思われるかもしれません。けれど、そもそも私が外国語を学びたいと考えた理由は、小さい頃から漠然と異文化に興味を抱いていたからなんです。そして、私がなぜ異文化に興味を抱いてきたのかを改めて考えてみると、さまざまな背景や感性を持つ人とお互いに刺激を与え合って、私自身も新しい発見をする。その発見が楽しくて、じゃあどうしたら多文化共生ができるのかな、と知りたいことが次々と出てきたからだと思うんですよ。でも、いざ大学でいろいろと学んでみてもその答えは見出せなかつた。というよりも、問いの中心にある「文化」がわからなくなってしまったんです。そんな時に出会つたのが、早稲田大学の細川英雄先生の「言語文化教育」という考え方でした。彼は文化的境界線を国や地域という大きなものではなく、個人というずっと小さな単位に引き戻して、その個人が他者との関係を築いていく能力を個人の文化として捉えているんです。私は「これだー」と思い、自分の文化と他の文化の相互触発を促すことのできる職業という観点から、日本語教師になろうと決心しました。

そして今、これまで自分がやつてきたことを改めて振り返つてみても、無駄はなかつたようになります。私は異文化について知るために、英語やフランス語を一生懸命学んできた。そして、SFCではフランス語のほかにも異文化交

流と関係の深い国際関係や地方自治について学ぶことができた。もちろん、多くの学生と同じように、自分の将来について悩んだ時期もありました。でも今は、そのようにして悩みながらも、自分が興味を持つことに力を注いでできただからこそ、最終的に日本語教師というはつきりした目標を見つけることができたんだと思うんですね。

## ■ 語学のすすめ

学生のなかには語学に苦手意識を持ついる人もいると思います。苦手意識があると、授業で発言するのも気が引けてしましますよね。でも、語学って文法知識や発音の良さよりも、何か相手に伝えたいことがある」ということが、いちばん重要なんだと思います。いくら文法などおりに話せても、自分に表現したいものや伝えたいことがなければ、結局は宝の持ち腐れになってしまいます。SFCには、「伝えたいことを持っている人がたくさんいる」と思います。だから、いろいろな国の言語を学んで、日本や英語圏に限らず、伝える世界そのものを広げてみてほしいんです。そうすれば人間関係や活動範囲もぐんぐん広がつて、価値観も変わっていくと思うよ!



リモージュでの文化交流プログラムにて。

総合政策学部助教授 國枝孝弘

一つは、「〇〇語」の〇〇がもたらしてくれる世界観。フランス語ならば、フランスについて発見するということです。ヨーロッパ大陸の一言語であり、しかもアメリカとは対照的な考え方をすることが多いフランスという國の言語を学ぶことは、自分の視点を相対化する意味でも価値があります。また人文諸科学、芸術の分野においてもフランスは独自の思想を持っています。

二つめは、「〇〇語」の国にとどまらず、その先に広がる世界を発見するということです。フランス語を話している地域は、カナダの一部、西インド諸島など世界各地に広がっています。またフランス語は、アフリカを研究する際の大きな窓口でもあります。国際機関の作業語であることも考え合わせれば、世界全体を見渡すための重要な言語のひとつなのです。

フランス語セクションでは、来年度からインテンシブコースを従来の1・2・3よりも上の4のレベルまで拡充し、基礎体力養成の徹底を図るとともに、言語および教育・文化・地域という専門領域にフランス語を用いて切り込んでいく、上級レベルまでの貫したカリキュラムを実施します。

# Co-net

Communication & Network  
~未来をつくる卒業生たち~

第20回 川下順子さん

株式会社 資生堂 経営企画部  
1998年 総合政策学部卒業



## 子育てを自己成長の糧に

かつて「未来からの留学生」としてSFCで学んだ学生たちは、いま実際に未来を創り始めている。彼らはSFCで何を学んでいたのだろう。現在はどんな職業についているのだろう。この企画では、卒業生に社会での奮闘の様子を聞くとともに、今後社会へはばたこうとする現役SFC生へのアドバイスを求める。今回は、子育てをしながら資生堂の経営企画部で働く川下順子さんにインタビューした。

——就職前から子供を持つても仕事を続けよう、という考えをお持ちだったのでしょうか。

す。営業の仕事を1年ほど経験した後、本社に転勤となり、役員の専属秘書をすることになりました。その1年半後、思いもよらぬ内示があり、厚生労働省に出向することが決まりました。そこで配属されたのは雇用均等・児童家庭局雇用均等政策課（旧労働省女性局女性政策課）という部署です。私は職場における女性の活躍を支援する「ポジティブアクション」の推進を担当しました。2年間の出向の後、再び会社に戻ったのが2002年の12月で、経営企画部の所属となり、途中に約1年半の産休・育休を挟んで現在に至ります。

「会社を辞める」ことも選択肢のひとつに——入社されてから現在まで、どのように仕事をされてきたのですか。

事に復帰することもできました。いろいろ悩んだけれども、復帰を決めたからには、子供に保育園生活を強いている分、精一杯に働くなくては子供に対しても申し訳ないという思いがすごくあります。今は育児短時間の制度を使って就業時間を短くしているので、仕事は常に時間との戦いです。子供を迎えに行く時間は決まっていますから、一日の時間配分や上司とのコミュニケーションには特に気をつかっています。でもそれがすごく

徐々にママ友達もできて毎日を楽しむようになつたら、今度は復帰を決心するところが大変になつてしましました。それでも復帰に踏み切れたのは、家の近くに保育園が見つかり、夫や母から「せっかく働ける場があるので、やれるここまでやつてみたら?」というバックアップの言葉をもらえたからだと思います。それから、職場の先輩ママ達が妊娠中からいろいろとアドバイスをくださっていたのも大きな支えとなりました。ロールモデルが近くにいたおかげで、出産前から具体的な「仕事と育児の両立」のイメージをつかむことができました。最終的には安心して土

—産休前と復帰された後では、仕事の取り組み方に変化は何かありましたか。

よい緊張感になつて、以前よりも密度の濃い仕事ができていると感じています。

働く母親にとっては、「子供の『小学校入学』がひとつの山と言われていますが、今はまだどうなるか全然予測がつきません。ただ、万が一この先子供にとって良くない事態が起きて、それが会社を辞める以外に克服できないということであれば、その時はきっぱり辞めるかもしれません。

「会社を辞める」ということも常に選択肢のひとつに入れておくことで心の平穡を保ちつつ、だからこそ、子供が保育園に通っている今は時間的に安心して働けるのだと思い、とにかく悔いのないように一生懸命働くこうと考えています。

——産休から仕事に復帰したとき、仕事のブランクは感じませんでしたか。

私の場合はあまり感じませんでした。

復帰後の所属グループは産休前とは異なりましたが、たまたま以前担当していた仕事の一部を引き継ぐことになったので、それが足がかりとなつてスムーズに溶け込むことができました。むしろ、業務的に少々慌しいスタートだったので、ブランクを感じている暇がなかつたという具合でしたね。自分でも意外だったのですが、仕事場での自分と、自宅での自分と、自然と切り替えるができるようになります。忙しい職場では、子供のことばかりを考えていられないですね(笑)。逆に家では仕事をのことはなるべく忘れて、子供と過ごす時間を最優先にしています。

## 偶然をキャリアに結び付ける

——SFCで学んだことがありますか。



## 時間に制約があるからこそ、濃い仕事ができる

機に「自然の流れに身を任せて偶然というチャンスを楽しもう」と思えるようになります。

不思議と肩の力が抜けて仕事に前向きになりましたように思います。仕事に限らず、予期せぬ偶然は自分の人生に面白いことをもたらすかもしれない。だからどんな偶然が影響もあって、折に触れて自分の会社や仕事を客観的に捉えて考えることができます。

キャリアの考え方で、「計画された偶発性」(Planned Happenstance Theory)というのがあるのですが、入社8年を経て、私は少しだけこの意味を実感でてきた気がします。SFC生つてキャリア意識の高い人が多いですが、「自分のキャリアはこうあるべき」というのを、ちょっと固く持ちすぎている人も多いような気がします。もちろん夢を持つのは大事なことです、予測不可能なことは、人生においていろいろと起きてくる。たとえば、私の仕事ひとつとっても、當業→秘書→役所への出向→経営企画部、なんていうキャリアステップは入社当初にはまったく考えていました。入社時は人事部に所属して人事のプロになりたいと考えていたんですよ。でも、秘書の仕事を通じて社内のネットワークを広げることができたり、社外に出向したことで資生堂という会社を客観的に見つめ直せたり、一見何のつながりもないような二つの経験が、経営企画部での今の仕事にたいへん役に立っています。自分で意図したキャリアステップではありませんが、結果的にはいろいろな偶然が複雑に結びついて今があるのだと思っています。私も入社3年目ぐらいまで自分のキャリアは自分で描くと頑なになつっていた時期がありました。でも、出向を

——学生へのメッセージをお願いします。

SFC生はキャリア意識が高いからこそ、将来に対する不安も大きくなると思います。とくに女性は「仕事と家庭の両立」について、この先悩むことがあるかもしれませんね。でも、出産をハンデと捉えるか、チヤンスと受け取るかは自分次第。子育ては確かに大変ですが、自分自身の成長にもつながっていると私は実感しています。何よりも、自分の子供は無条件に愛しいですし、守るべき人がいるというのはすごいエネルギーになりますよ。今後もSFCの女性はどんどん社会に出ていくでしょうから、働くお母さんがもっと増えていくって、皆の力で女性が働きやすい社会をつくつていければいいですよ。

星の数ほどある書籍の中から、本当に価値ある本を見つけるのは容易なことではない。しかし誰でも、読んで深い感銘を得た、忘れない一冊があるはずだ。

この連載では、それぞれの道で活躍しているSFCの教員が、学生へのメッセージというかたちで、特定の書物について語り、「私の推薦図書」とする。

今号に登場するのは西岡啓二環境情報学部教授。

推薦図書は、遠山啓著『数学入門(上)』、小倉金之助著『日本の数学』である。

# 私の推薦図書

## 青春の数学

小学校のときには面白かった算数が、数学という名になると、なんともとつつきにくい科目に変わった。算数の巧妙な考え方、文字計算の練習がとつてかわったのである。小学校低学年での九九や四則の練習と同じことで、導入部では仕方のないことなどが、やはり面白くない。しかし、比例という概念に遭遇したときには戸惑い、そして興味をもつた。理由は簡単、難しかつたからである。難しいものを理解することはやりがいのある仕事である。このあたりから数学というのはただものではないと感じ始めた。概念というものをはじめて感じたのである。

そこで数学というものをすこし勉強してみたくなった。頭のいい女子がクラスにおいて、秀才のお兄さんの本を貸してくれた。それが遠山啓著『数学入門(上)』(岩波新書)である。

遠山啓は東北大学出身、整数論の専門家であった。ある日、整数論の大家ヴェーユ(彼は、哲学者シモーヌ・ヴェーユの兄である)が、遠山君は今どうしているのかねと尋ね、数学教育を主にしているとの答えに、それも大事だねと残念そうに反応したという。遠山さんは、当時、算数教育を改革しようとしていたのである。いわゆる水道方式(注1)はその成果だ。公文公(くもん・とおる)さんはこれを事業化し、そ

うしてできたのが公文式である。しかし数学者の岡潔は、水道方式を誤りだと非難した。岡さんのお話は難しいが、遠山さんの本は分りやすい。

『数学入門(上)』は数の発展史を説明する人はどのようにして数を認識し始めたか。子供たちは数をどう把握しているのか。遠山さんは、発達心理学者であるピアジエの理論も援用する。ピアジエは構造主義を標榜していた。当時、数学の構造主義であるブルバキ(注2)がはやっていた。そういう背景も読み取れるが、彼は教育における歴史の有用性をよくわかっていた。社会や文化の面から数学をとらえることが大変重要だと思っていた。数の体系は、整数、有理数、無理数、実数、複素数と社会発展に関係して拡張されてきた。現在も新たな数が生まれている。現象をより豊富に理解するためにそのことは必然である。遠山さんの本には代数的な記述が多いが、ユークリッド、ピタゴラス、ニュートン、オイラー、ガウスといった数学のスーパースターの逸話だけでなく、ゲーテ、スタンダール、ハイヤームなどの文学者との関連にも言及している。遠山さんの話題の豊富さには感心する。『数学入門(上)』は、まっすぐ行くのがいちばん早いということをロバでも知っていることを紹介している。また、わたしが分析と総合という概念を知ったのもこの本であった。

### (注1) 水道方式

子どもができるだけ少ない練習量で、確実に計算力がつくように工夫された計算練習の方式。

膨大な計算量を型分けし、その計算指導の道筋を示したもの。

### (注2) ニコラ・ブルバキ

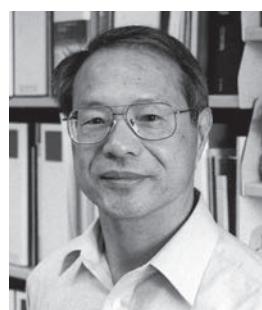
架空の数学者。フランスの若手数学者集団の筆名で、1935年に生み出された。

数学者ヴェーユは、その創設メンバーの一人。

西岡啓二(にしおか・けいじ)

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員。

大阪大学理学研究科博士課程修了。  
専門は微分代数。



# 遠山啓著『数学入門（上）』

## 小倉金之助著『日本の数学』

をもつたことは確かである。当時高校生だった姉の教科書を読んだり、優秀な友達のお父さんの本を貸してもらったりもした。そして大変印象深い本をみつけた。小倉金之助著『日本の数学』（岩波新書）である。

小倉さんは東大（化学）を中退後、家業を継がずに数学を研究することにした人だが、はじめは微分幾何学を専門にし、そののち、当時としては珍しい数学史の研究に専念した。日本数学界の指導者であつた高木貞治が小倉さんを勵ましたといわれている。小倉さんは山形県酒田市の出身だが、その酒田市をわたしは二年前の一月に合宿で訪れた。突然ふぶきに見舞われたのにちはびっくりしたが、むかしの京都とのつながりが町の佇まいに現れていて、落ち着いた情緒のある街であった。小倉さんは裕福な街の裕福な商家の出だつた。その彼が飯の種になりそうもない数学史に取り組むことになつたのであるから、まわりの者の非難もさぞかしだつただろう。彼は東北大学そして大阪大学に職を得た。両大学とも数学史に登場する文献が大変よく揃つてゐる。彼のおかげだと思う。わたしは大阪大学大学院生のころ、彼の収集した文献に大いにお世話をなつた。古い書籍は旧書庫に埋蔵され、参照するには鍵を開けてかび臭い部屋に入り込まなければならぬ。しかし、ほとんど誰も利用していなかつたので、わたしは独占

しているような気分になり、そこはユートピアであった。『日本の数学』は、桑原武夫編『日本の名著』（中公新書）に日本近代思想の書として紹介されている。この本自身、すばらしい本だと思う。

『日本の数学』は今日和算とよばれている江戸時代に発達した日本独自の「数学」について、その成果と、限界について、社会体制や文化の特質から解釈を試みている。和算社会のギルド性が「数学」の発展を阻害したことが指摘されているのである。注目すべきは和算の記号論である。算木を抽象した筆算の発明はヨーロッパでの代数の発明に類似する。和算は発展する可能性がなかつたわけではないが、明治にはいつて洋算が（和算の技術をもつた人たちによって）普及したため、その契機を失つた。とにかく、中学生だったわたしに、ギルド性は強い印象を与えた。

「数理と社会」という授業でわたしは、数学の歴史を紹介した。『数学入門（上）』と『日本の数学』がわたしの頭の中にあつた。遠山さんも小倉さんも数学教育について確かな見識をもつた人である。大学教育において数学はどのような役割を果たしうるのかと悩むとき、お二人の著書がよい助言を与えてくれる。



写真上から順に  
遠山啓著『数学入門(上)』岩波書店、1959年  
小倉金之助著『日本の数学』岩波書店、1940年  
湘南藤沢メディアセンターの請求番号は上から順に  
000@IW1@2-363  
000@IW1@1-61

# SFC FRONT RUNNER

2006年11月、SFCと大日本印刷株式会社(以下、DNP)から「創発する社会」が刊行された。この書籍は、2004年9月に始まったSFCとDNPとの「ラボレーション・プロジェクト」「慶應SFC～DNPセミナー」の中間成果物と位置づけられている。このプロジェクトでは、社会における情報コミュニケーションの発達と、それによる「創発的社會」のビジョン探求を目的とし、研究が進められている。「創発」とは本来、自然科学の複雑系の概念だが、近年、社会がより流動的になってきたことにともない、幅広い分野で注目されるようになっている。慶應SFC～DNPセミナーでは、社会科学およびテクノロジーの視点から「創発的社會」の実現を探求していく。「創発」とはいったい何なのか、「創発」が起こりやすい環境や、面白い」と、このプロジェクトのメンバー、清木環境情報学部教授は言う。また同じくメンバーの一人である土屋大洋政策・メディア研究科助教授は、「創発」を引き起こうとした

ているのである。

この慶應SFC～DNPセミナーの特徴は、12人のSFC教員がプロジェクトメンバーとして、「創発」というきわめて怪しくて魅力的なテーマに取り組んでいるところにある。そのため、特定の分野の研究者が具体的なテーマを追究するために集まるプロジェクトとは異なり、各メンバーの研究分野は多岐にわたる。さまざまな分野の研究者が企業と連携して推進する慶應SFC～DNPセミナーは、SFCのなかでも新しい試みなのではないだろうか。

「異分野の人と同じテーマでコラボレーションする」とにより、どついう点で共感が生まれるかがわかつてくる。この経験は新しく、面白い」と、このプロジェクトのメンバー、清木環境情報学部教授は言う。また同じくメンバーの一人である土屋大洋政策・メディア研究科助教授は、「創発」を引き起こうとした

「合同合宿でも、皆、夢中になつて言つたことを言い合い、スリリングに、次々と議論が展開していった」と話す。「のような議論を通じ、「創発」に関する定義や、「創発」のメカニズムに関する仮説が生まれてくる。「これらの概念をまとめたのが、前述の『創発する社会』なのである。

## Vol.6

# 創発をめぐって —SFC～DNPセミナー—

「異分野の人と同じテーマでコラボレーションする」とにより、どついう点で共感が生まれるかがわかつてくる。この経験は新しく、面白い」と、このプロジェクトのメンバー、清木環境情報学部教授は言う。また同じくメンバーの一人である土屋大洋政策・メディア研究科助教授は、「創発」を引き起こうとした

すれば、表現形式を決めるのは作り手側の感性だけでなく、ユーザー個々の情報や、メディアデータの内容も、大きな要素となる。そして、これら受け手側からの要素は、表現形式の作り手側にも作用を引き起こう。この表現メディア自身が「創発」をうみだす道具となり、新しい価値観を「創発」するのである。

また、加藤文俊環境情報学部助教授と南政樹政策・メディア研究科講師が中心となつて進めていくプロジェクトもある。「このプロジェクトが目指すのは、「偶然



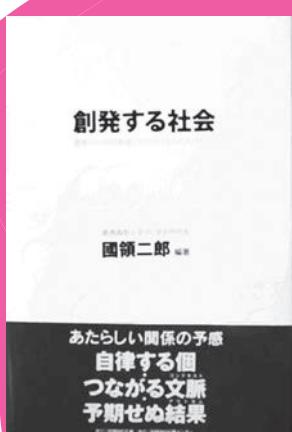
の出会い」が起きる確率を上げるシステムの「デザイン」である。ふだん、私たちは人に会うとき、お互いの時間を調整し、会うための場をセッティングする。しかし、このような意図的に設定された「フォーマルな出会いではなく、明確に意図しないインフォーマルな出会いを誘発することにより、「新たなコミュニケーションをうみだそう」としている。具体的には、「Belugaプロジェクト」によって整備されたインフラを活用し、SFCのキャンパス内に約200箇所(2006年12月時点)設置されたRFIDローラーハーベスト、個々人が持ち歩くRFIDタグによってデータを収集する。このデータは、各人の行動情報として共有できる」とから、たとえば「誰かに会いたい時、今の時間帯ならばSFCに行く」と

その人に会える確率が高いか」、あるいは「どの時間帯のどの場所に人が集まる傾向があるのか」を推測できる。つまり、このような仕掛けを提供することで、インフォーマルな出会いを誘発し、創造的な「ミニケーションを引き起す」、そうしているのである。

清木教授によれば「創発」とは「創りだして発信すること」を意味する。教授は言う。「新しい創発の種をうみだし、発展させていく」とは、日本のような資源のない国には非常に重要である。だから、SFCが「元となる種、つまり『創発』をつくりだすための具体的な方法論をうみだしていく必要がある。これが慶應SFCとDNPセミナーの目標だ。今後も慶應SFC～DNPセミナーとして『創発』に関するメッセージを考え、社会に発信していく」。加藤助教授も「今回のように成果が一冊の本になると、結果が形に表れるのでわかりやすい。しかし、クリエイティブに終わりはない」と言っている。

『創発する社会』には、それぞれのプロジェクトメンバーたちの「創発」への思いが込められている。土屋助教授は語る。「『創発』という言葉を、皆が違う定義で議論している。そういう違った定義をあえて一冊にまとめたというところが面白いと思っている。読者には、それぞれの『創発』に対して共感したり、批判的な判断を下したりしていただきたい。『創発』に関して何かひとつの定義を押し付けるつもりはまったくなく、この本をきっかけにして、『創発』というものが何であるのか、という議論を創発できれば」と。

## 本の紹介



### 『創発する社会』

本書では「創発」の意味やその可能性について、従来論じられてきた仮説を軸にSFCの12人の研究者がそれぞれの専門の観点から自説を展開し、議論を交わしている。現代社会に向けたSFCとDNPからのメッセージが込められた一書です。  
(國領二郎(編著) 日経BP企画 2006)



# A YEAR IN REVIEW 2006

SFCの1年を振り返る本企画 A YEAR IN REVIEW。今年度は少し趣向を変え、イベント、キャンパス、授業など、SFCのさまざまな場面から5つのトピックを取り上げてお送りする。(文責 KEIO SFC REVIEW 編集委員会)

## キャンパスへ帰ろう—Home Coming Day 2006 開催—



2006年10月15日、日吉キャンパスでホームカミングデイ2006(以下、HCD)が開催された。前年度のHCDはORFと同日に開催され、しかも会場は六本木ヒルズという好条件で行なわれたが、今年度のHCDはSFC生に馴染みの薄い日吉キャンパス、さらには参加費用を求められたことも手伝ってか、残念ながら参加者は大幅に減り、125人に留まった。

しかし、今年のHCDには新しい試みがあった。今回は、連合三田会大会と同時開催だったのだ。塾員のイベントといえば「連合三田会大会」といっても過言でないほど歴史のあるイベントだが、これとHCDが同時開催されることで、SFCが義塾の一員であることを、内外へ改めてアピールする効果があった。また、EliicaやSIVの展示を通して、卒業生にとっては懐かしく、他学部の塾員にとっては新鮮な“SFCらしさ”を印象づけた。加えて今年度は、ひとつの「サプライズ」が会場を沸かせた。安西祐一郎塾長と村井純常任理事(環境情報学部教授)が急遽、HCDの会場を訪れたのである。特に塾長のHCDへの参加は初めてのこと、会場は驚きに包まれた。その他にも、現職・退職あわせて17名の教員がHCDに参加しており、とても豪華な顔ぶれがそろった。

2007年もHCDは開催予定ではあるが、場所・日時ともに未定とのこと。今年こそ、SFCに卒業生は戻ってくるだろうか。期待して、続報を待ちたい。



## SFCで水が湧いた！—地下水利用で経費削減へ—

2006年11月24日、SFCで地下水の利用が始まった。実はこの地下水利用の計画、始まったのは約2年も前の話だった。湘南藤沢事務室総務担当の小友博さんに地下水利用に至る経緯と理由を聞いた。

「調査した内容はさまざまです。そもそもSFCで地下水は湧くのか、というところから始まりました。その次は、湧くとしたらどんな水なのかを調べる必要があった。具体的には、飲料水にするための消毒処理の方法やそのコスト、実際に湧く水の量などですね。消毒に費用がかかり過ぎたり、すぐに枯れてしまったりすると困りますから。さらに、このまま水道局から水を購入した場合と、地下水を掘って利用した場合のコストの関係も重要でした。そういうことを、約1年かけて専門業者に調査していただきました。すべての調査を踏まえて、地下水の利用を決めた理由は大きく3つあります。ひとつは、それまで購入していた水よりもかなり安いということ。もうひとつは、安定した供給が可能になるということ。これまででは水道管の関係で、SFCは夜間に地下のタンクに、翌日分の水を溜めておく仕組みでした。しかし地下水を利用すれば、水道管を利用せず直接、タンクへ水を運べるので、常にタンクには水を満たしておくことができる。たとえば秋祭などのイベントで急に水の消費量が増えるときは、タンクが空に近い状態になってしまったことがある。これからは、その心配をする必要がなくなる、ということなんですね。さらに、非常時にも水の確保がしやすくなります。地下水を利用していれば、もし災害が起こって水道局から水が供給されなくなても、電源さえ確保できれば、簡単に水を用意することができる。SFCは非常時の広域避難場所にも指定されていますから、普段の生活だけではなくて、そういう意味でもとてもメリットがあったんです。」

現在、SFCでは年間約4万7千トンの水が利用されている。これからはこの9割を、1時間に12トン湧く豊富な地下水で賄っていく予定だという。

## 正面階段、補正される—SFCがちょっと快適に—

なんとなく違和感を覚えているけれど、何が違うのかわからない。そんな気持ちになった人は意外に多かったのではないだろうか。SFCの正面階段の話である。利用した誰もが一度は「歩きづらい！」と感じたことのあるあの階段が見事、生まれ変わっていたのである。詳しい話を地下水利用に引き続き、小友さんに聞いた。

「工事を行なったのは2005年の夏休み、学校が一斉休暇になっている一週間で行ないました。正面階段のすぐ近くにはバス停もあって、駆け下りる学生も少なくないですから、安全を考えれば、一気に直してしまう必要があった。でも一週間という期間はやはり短くて、結構たいへんでしたね。工事といっても、最初は事務室のスタッフや清掃スタッフの方を何人か呼んで、歩行実験をすることから始めました。階段を一部だけ組み直して、実際に歩いてみると、以前と現在とでは、狭い段と広い段の組み合わせ方が変わっているのですが、これはその実験をやってみて、決めたんですね。以前は『あんな歩きづらい階段はない！』と、すごい数の苦情が来ていたのですが、工事後はその数も激減しました。ただ、なかなか直ったことまでは気がつかないようで、実際に『変わったね』と言ってくれたのは、たった3人くらいだったんですが（笑）。」

利用者が気づかない（最大の？）理由は、工事が行なわれた時期ではない。工事前と後で、見た目にほとんど変化がないのが理由ではなかろうか。従来の階段を一度解体し、その素材をそのまま現在の形に組み直して、階段が造られているので、一見しただけでは、変化に気づくことができないのだ。SFCがデザイン的に凝ったキャンパスであるのは周知の事実。今回、大規模の工事が施されたにもかかわらず、そのデザイン性を損なわない仕上がりになっている。

今まで気がつかなかった人もぜひ、今度はその「歩きやすさ」を実感しながら、正面階段を歩いてみてほしい。

## 2006年度個人賞受賞者一覧

### —さまざまな分野で活躍するSFC生—

SFCの学生はさまざまな分野で活動している。その活動が評価されることは、とても喜ばしいことだ。その一部ではあるが、以下に紹介する。

第58回学生広告論文電通賞 2位入賞

総合政策学部 4年 南雲朋美

第6回レオパレス21夢・実現コンテスト ブロンズドリーム賞受賞

総合政策学部 1年 杉本健一

Laval Virtual 2006 Laval Virtual Grand Prix du Juryほか受賞

政策・メディア研究科 3年 森田正彦ほか

第75回日本学生陸上競技対校選手権大会 男子800m優勝

第90回日本陸上競技選手権大会 男子800m優勝

第12回アジアジュニア陸上競技選手権大会 男子800m優勝

総合政策学部 1年 横田真人

第84回全日本選手権大会 女子シングルスカル準優勝

全日本大学選手権大会 女子シングルスカル優勝

環境情報学部 4年 青山恭子

国際チェス連盟マスター 資格取得

総合政策学部 3年 中郡慧樹

全日本学生テニス選手権大会 男子シングルス準優勝

全日本学生室内テニス選手権大会 優勝

環境情報学部 4年 松永浩気

FIBAバスケットボール男子世界選手権 代表選出

総合政策学部 4年 竹内公輔

全日本選抜選手権大会 スケート部スピード部門3000m優勝

総合政策学部 4年 田上真一

WISS2006 対話発表賞

政策・メディア研究科 2年 後藤孝行

政策・メディア研究科 2年 永田周一

政策・メディア研究科 1年 渡邊恵太

平成18年度 優秀学生顕彰事業 学術部門大賞

総合政策学部 4年 林英一

第15回アジア競技大会 日本代表選出

総合政策学部 3年 山田章仁(蹴球部)

総合政策学部 4年 竹内公輔(バスケットボール部)

第9回ロレアル 色の科学と芸術賞 銅賞

政策・メディア研究科 3年 森田正彦ほか

第28回よみうり写真大賞 報道部門 2席受賞

環境情報学部 3年 蓮村俊彰

## 2006年度ゲスト講演紹介

SFCでは毎学期、多くのゲストが講演を行なっている。すべてを記すことはできないが、本誌編集委員の取材を元に、ここにその一部を掲載する。

行政管理論(玉村雅敏総合政策学部助教授担当)

清原慶子氏(三鷹市長)

中橋勇一氏(プランニングネットワーク東北理事長)

熊坂研究室(熊坂賢次環境情報学部教授担当)

吉田就彦氏(デジタルハリウッド大学大学院教授)

福田研究室(福田和也環境情報学部教授担当)

リリー・フランキー氏(イラストレーター兼コラムニスト)

現代と社会システム(井庭崇総合政策学部専任講師担当)

宮台真司氏(社会学者)

リージョナルアナトミー論 I(神保謙総合政策学部専任講師担当)

ジェームズ・D・ケリー氏(在日米海軍司令官)

デザイン言語ワークショップA(佐々木一晋環境情報学部非常勤講師担当)

早川大地氏(東京エスムジカ)

政策デザイン論 A(加藤秀樹総合政策学部特別招聘教授担当)

藤井裕久氏(元大蔵大臣)

国際社会と法(青木節子総合政策学部教授担当)

中田達也氏(文教大学国際学部非常勤講師)

比較文化 C(山本純一環境情報学部教授担当)

小坂井敏晶氏(パリ第8大学心理学部)

インテンシブ・フランス語

大野博人氏(朝日新聞外報部長)

井上研究室・金子研究室・玉村研究室(井上英之総合政策学部専任講師、金子郁容政策・メディア研究科教授、玉村雅敏総合政策学部助教授担当)

渡邊奈々氏(写真家)

リージョナルアナトミー論 E(阿川尚之総合政策学部教授担当)

伊藤直樹氏(外務省国際協力局総合計画課長)

趙泰永氏(在日韓国大使館参事官)

秋葉剛男氏(外務省アジア大洋州局中国課長)

吳江浩氏(在日中華人民共和国大使館参事官)

相川一俊氏(外務省アジア大洋州局地域政策課長)

川口正樹氏(外務省アジア大洋州局南東アジア第一課カンボジア班長)

兼原信克氏(外務省総合外交政策局総務課長)[ほか]

現代技術論(清水浩環境情報学部教授担当)

蓮見孝氏(筑波大学人間総合科学研究科教授)

モデリングシュミレーション入門(井庭崇総合政策学部専任講師担当)

増田直紀氏(東京大学大学院情報理工学系研究科講師)

地球環境政策論(浜中裕徳環境情報学部教授担当)

マーク・パレマール氏(ブリュッセル自由大学教授)

コミュニケーションと政策形成(古石篤子総合政策学部教授担当)

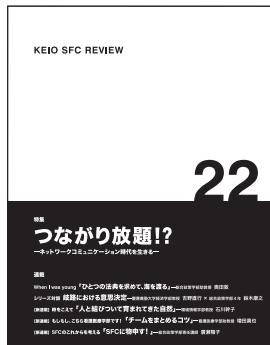
小嶋勇氏(弁護士)

知識情報論(小檜山賢二政策・メディア研究科教授担当)

武田隆氏(株式会社エイベック研究所代表取締役)

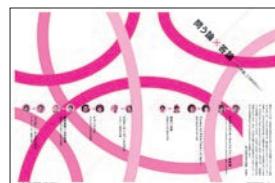
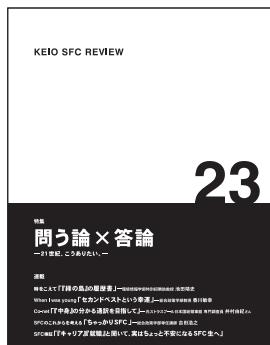
# KEIO SFC REVIEW バックナンバー

No. 22



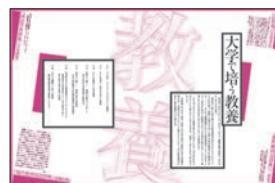
特集  
つながり放題！?  
—ネットワークコミュニケーション時代を生きる—

No. 23



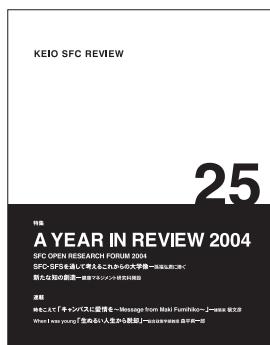
特集  
問う論×答論  
—21世紀、こうありたい。—

No. 24



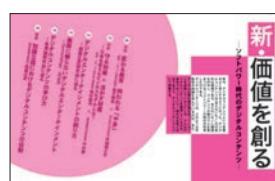
特集  
大学で培う教養

No. 25



特集  
A YEAR IN REVIEW 2004

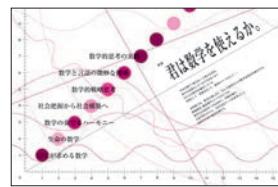
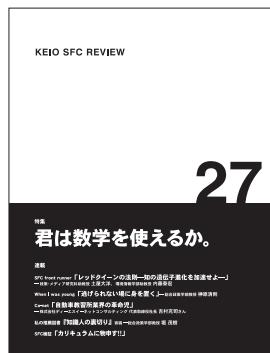
No. 26



特集  
新・価値を創る  
—ソフトパワー時代のデジタルコンテンツ—

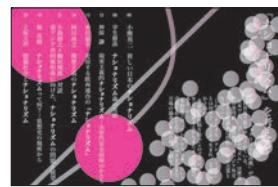
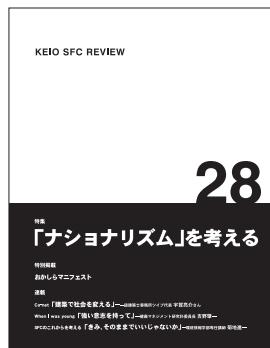
シリーズ対談  
「ものづくりの心得」 TBS「世界遺産」チーフプロデューサー 辻村國弘 × 環境情報学部3年 蓮村俊彰  
キャンパスへ帰ろう  
アメリカでの2年8ヶ月を終えて 総合政策学部教授 阿川尚之

No. 27



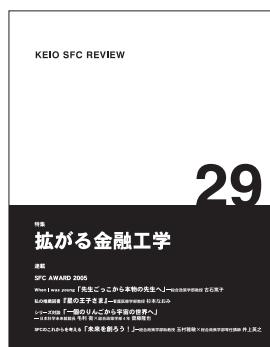
**特集**  
君は数学を使えるか。

No. 28



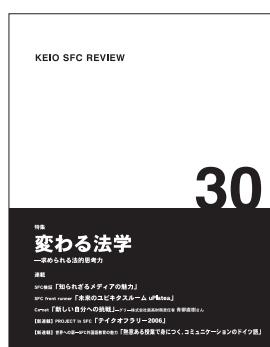
**特集**  
「ナショナリズム」を考える

No. 29



**特集**  
拡がる金融工学

No. 30



**特集**  
変わる法学  
—求められる法的思考力

No. 31



**特集**  
メディアが変わる、メディアが変える

# KEIO SFC REVIEW No.32-33

## 編集長

藤山 奈月（総合政策学部4年）

## 副編集長

朝倉 麻衣（総合政策学部4年）

田村 佳菜（環境情報学部4年）

## 編集委員

百谷 健奈（総合政策学部4年）

馬越 初美（総合政策学部3年）

小野島 茉莉（総合政策学部3年）

田中 康範（総合政策学部3年）

西浦 華織（総合政策学部3年）

小杉 崇文（環境情報学部3年）

中牧 莉香（総合政策学部2年）

隈田原 幸大（環境情報学部2年）

坂本 茜（環境情報学部2年）

柴 光則（総合政策学部1年）

松原 真倫（総合政策学部1年）

田中 舞（環境情報学部1年）

力石 大輔（環境情報学部1年）

## 湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当

堀 茂樹（総合政策学部教授）

## 事務局

田坂 真美

## 編集後記

苦労話を始めれば際限ないが、それでもなんとか（周囲に多大な迷惑を与え、代わりに数え切れない助力を受け、ついでに学業にもいくらかの犠牲を払い）この特大号の発行にまでこぎつけることができた。ここまで道は決して平坦ではなかったが、望む景色はなかなか悪くない。高校生の頃、数学の先生がよく言っていた。「おまえら、凄い世界に連れてってやる。」あの時は、必死になつても付いていくことしかできなかつた。あれからもう6年が経つたが、今は多少なりとも次の「凄い世界」というやつに、自分の足で近づけたのだろうか。とにかく、何かをつくる（それも誰かと一緒に）ということは、非常に難しく、かつ厳しい。しかし「悔しい」ことに、これが非常に魅力的なものも事実である。

この一冊が読まれている頃、おそらくわたしは既にSFCにいなくて（卒業する「予定」なので）、SFCでは新たなカリキュラムのもと、新たなメンバーとともに、新たな学期が始まっているだろう。今年度までのカリキュラムだって、良いカリキュラムだったんだと思う（少なくともわたしは、充分に幸せだったし）。それでもSFCは再び、新たに幕を上げようとしている。その中で、学生がそれぞれ何をつくるのかはまったくの自由だ。設計図を描く紙は、まだ白い。きっと、たくさんの方がある。きっと、どういうふうにやっても面白い。けれど、その設計図からつくられるものをどうしたらより魅力的にできるか、そのヒントがこのSFC REVIEWにあるかもしれない。と、わたしは信じている。信じて、今までやってきた。だから気が向いたら、またこの雑誌を手にとってほしい。

KEIO SFC REVIEW 32-33 合併号編集長 藤山 奈月

2007年3月20日 発行

発行人 德田 英幸

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会  
〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤5322  
Tel 0466-49-3437  
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>  
gakkai@sfc.keio.ac.jp

制作・印刷 株式会社ワキプリントピア  
〒252-0815 神奈川県 藤沢市石川6-26-19  
Tel 0466-87-5811  
Fax 0466-88-6560  
<http://www.printopia.co.jp/>

■ 無断転載・複製を禁じます。  
ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

最新号およびバックナンバーを  
ご希望の方はご連絡ください。

現在販売している号は、第6号および  
第18号～最新号（31号）です。  
詳しくは、湘南藤沢学会ホームページ  
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>を  
ご覧いただか、もしくは事務局までご連絡ください。

TEL ☎ 0466-49-3437

FAX ☎ 0466-49-3594

MAIL ✉ gakkai@sfc.keio.ac.jp



**KEIO SFC REVIEW No.32-33**

**湘南藤沢学会 2007.03.20**

**ISSN 1343-3318 定価 300円(消費税込)**